渡海の絵巻
――いけのや文庫蔵『御曹子島渡り』――

齋藤　真麻理

要　旨

明代に陸続と出版された日用類書は、仮名草子『異国物語』や奈良絵本『山海異物』等の典拠として活用され、中近世日本の異境表現に少なからぬ影響を及ぼした。

室町物語『御曹子島渡り』もまた、不可思議な異国・異境を語る代表的な作品のひとつである。伝本は比較的少ないが、いけのや文庫に所蔵される大型絵巻は三巻から成る貴重な一本である。二〇一七年八月、国文学研究資料館の国際共同研究「境界をめぐる文学―知のプラットフォーム構築をめざして―」により、その全文画像を当館ウェブサイトから公開することを得た。

本稿ではその簡略な紹介を兼ねて、江戸時代前期の奈良絵本特有の絵画表現について検証するとともに、明代日用類書の本文表記の「揺れ」が新たな説話を生成する可能性を考えてみたい。

一、明代日用類書と異境表現

フランス国立図書館スミス＝ルスエフ・コレクションに所蔵される奈良絵本三帖、題簽には『唐物語』とあるが、上冊内題に「異国物語」と見えるとおり、内容は仮名草子『異国物語』である。[1] 序文には「何の国には人のかたちかく有なとかたりけるに、かたはらいたくおもしろし」と述べられ、典拠は「三才図繪にくわしくあり」、それを読みやすく仮名書きにしたものが本書『異国物語』だという。

これを見るに、初心の人めやすからす、みるにせんなし。（中略）假名になをし、つれ〳〵のなくさみとせしなり。およそ一百四十余ケ国有。めつらしくちかひしことなりといふ。爰によそへ、すなはち異国物かたりと名つくるのみ。

（フランス国立図書館蔵『異国物語』）

以下、さまざまな国の人物が一図ずつ描かれ、毎半葉上部に一図または二図が配される。実在する高麗国等のほか、一目国や長人国といった想像上の国も多い。『異国物語』は万治元年（一六五八）に版行されるなど、人々の耳目を集めたと思われる。

『異国物語』の典拠は序文に従って『三才図会』と考えられ、「世界図屏風」等の影響も指摘されてきたが、近年、本書が拠ったのは『三才図会』ではなく明代の日用類書であることが判明した（海野一隆「『異国物語』の種本」『日本古書通信』九〇二、二〇〇四年九月）。日用類書とは、中国明代の後期、万暦・崇禎年間（一五七三～一六四四）にかけて大量に出版された絵入りの通俗書である。[2] 諸本の中には「諸夷門」という章を設ける伝本が散見し、紙面上段に「山海異物」を、下段に「諸夷雑誌」を配して多くの異形や異国人物図を収録する。この「諸夷雑誌」が約百四十

もの異国風俗を記した『異国物語』の典拠であり、フランス国立図書館の奈良絵本『異国物語』を生む土壌となったのであった。一方の「山海異物」は奈良絵本にも仕立てられており、ニューヨーク公共図書館スペンサー・コレクション蔵『山海異物』は陽明文庫蔵『天下全書博覧不求人』に拠ったことが判明している（拙稿「描かれた異境―明代日用類書と『山海異物』―」『絵が物語る日本　ニューヨーク スペンサー・コレクションを訪ねて』三弥井書店、二〇一四年）。

そしてここにもう一つ、不可思議な国々のさまを語る物語が存在する。それは室町物語『御曹子島渡り』である。

二、いけのや文庫蔵『御曹子島渡り』

『御曹子島渡り』の伝本は比較的少ない。松本隆信「室町時代物語類現存本簡明目録」には八本が三系統に大別されているが、最も多いのは第一系統で御伽文庫本を含めた六本が挙げられている（『御伽草子の世界』三省堂、一九八二年）。「伝本としては、渋川板の御伽草子本が流布し、絵巻や奈良絵本にも、その系統の本が多い」とも指摘される（『室町時代物語大成』第三「御曹司島わたり」解題）。「簡明目録」以後に公開された九州大学支子文庫蔵の絵巻二軸や、九曜文庫蔵の絵巻（上欠）も第一系統に属する。第二系統は第一系統とは構成が異なり、秋田県立図書館蔵の絵巻一軸が知られる。第三系統には簡略な本文を持つ寛文頃の絵巻一軸がある。[3]

新たな伝本も報告されつつあるが、そのうち、石川透氏ご所蔵の三点は挿絵のみの断簡で先掲「簡明目録」に未記載の横型奈良絵本であった。内容は『御曹子島渡り』の裸島の挿絵が一葉ずつ（A・B本）と裸島を除く挿絵十二葉（C本）である（同氏「『御曹子島渡』裸島絵二種」『奈良絵本・絵巻研究』第一〇号、二〇一二年九月。「〈研究ノー

ト〉『御曹子島渡』の伝本について」『文学・語学』第二〇八号、二〇一四年三月）。

横型の奈良絵本は兵庫県立歴史博物館にも一冊が所蔵され、全文のカラー画像が同館ホームページから公開された。本文は第一系統で古梓堂文庫本にやや近く、御曹子が「ちいさこじま」から「きけんじやう」に到着し、大王の前で笛を奏でる場面までの残闕本である。挿絵が切り取られた箇所もあるが、計三図が残り、構図や霞の表現等も含めて石川氏蔵の奈良絵本C本と非常に近い。大王の前で御曹子が笛を披露する場面などは、構図を反転させればこのC本と兵庫歴史博物館本はほぼ一致する。これらによって『御曹子島渡り』に横型奈良絵本が複数存在することが判明したのであり、石川氏のご指摘どおり、本作品は相当数の奈良絵本が制作され、流行をみたと推測されよう。

さらに二〇一七年八月、国文学研究資料館の日本古典籍総合データベースから、いけのや文庫蔵『御曹子島渡り』の全文カラー画像が公開された（書誌URL:http://dbrec.nijl.ac.jp/KTG_B_10025743 6）。文庫のご当主によれば、この絵巻は大奥に仕えていた女性がご当家に輿入れする際に主君から拝領した品で、代々大切に守り伝えてこられたという。

本絵巻は二〇〇九年に横浜開港資料館に持ち込まれたことがあり、稿者も一見させて頂く機会に恵まれた。当時の手元の控えによれば、まもなくテレビ番組「開運なんでも鑑定団」で紹介される由であった。その時点ではとくに表紙の傷みが激しく、ほぼすべての料紙の糊が剥離してばらばらになっており、辛うじて上巻第二三、二四紙と中巻第八、九紙は剥がれずに残っているという状態であった。しかしながら『御曹子島渡り』は伝本が少なく、三巻から成るいけのや文庫本はそれだけでも貴重であって、各料紙の保存状態は比較的良好、しかも挿絵の多くが二紙または三紙を継いで描かれた豪華本と拝見した。露呈した糊代部分に帳合を示す墨書があることも目を引いた。

後日、絵巻は表紙を改めて巻子装に修復され、二〇一二年に当該番組で紹介されたが、石川透氏による言及以外、全体像が学界に紹介されることはなかった。いずれ当館より画像公開させて頂いて学界に資することはできないかと

考えていたところ、二〇一七年春、ご当主より全文のデジタル公開と、修復前に稿者が撮影した手撮り写真を本誌に掲載するご許可も賜った。格別のご配慮を賜ったご当主に心より御礼申し上げる。(4)

以下、本書の書誌を簡単に記しておく。

『御曹子島渡り』　いけのや文庫蔵　江戸時代前期写　巻子装　三巻三軸

○表紙、もと紺色無地表紙を紺の布表紙に改装。現在の寸法は縦三三・一×横三六・一糎、全長一二九一・一糎（上巻）、縦三三・一×横三六・〇糎、全長九五三・二糎（中巻）、縦三三・八×横三四・〇糎、全長一五六五・八糎（下巻）。見返し、もとは銀切箔散らしの料紙が中・下巻に備わっていたが、現在は三巻とも無地の利休白茶の料紙に改装。軸は真鍮で修復前のもの。

○外題、金泥の下絵がある朱の原題簽「嶋わたり　上（中・下）」を貼付。中巻は「嶋」字欠損。題簽寸法、縦一五・八×横三・六糎（上巻）、縦一五・三×横三・六糎（中巻）、縦一五・六×横三・六糎（下巻）。内題なし。

○本文料紙、鳥の子。やや赤みのかった料紙も用いて色変わり風に仕立てる。全巻にわたって金泥で藤、沢瀉、葡萄などの下絵を描く。各料紙寸法は本稿末別表を参照。字高、二五・〇糎内外。印記なし。

○その他　下巻末に武州橘郡綱嶋村鎮守諏訪大明神御寶前奉詠の狂歌等を伴うが、本作品とは関係しない。伝来過程の偶然によるものであろう。

いけのや文庫本は諸本系統では第一系統に属し、九曜文庫の絵巻と近く、同一工房で制作された可能性が高い。挿絵の筆致が途中で変わるなど、複数の絵師が制作に関与していたと推測される。御曹子が朝日天女と出会う場面（中巻第一二紙）については本文に具体的記述はなく、しかも大王の屋形に招じ入れられる前に挿入されている。また、御曹子が海中を鬼達に追われる場面（下巻二三、二四紙）は「大職冠」の挿絵を連想させるが、本文にいう「うきく

つといふ馬なとに」乗った鬼は描かれておらず、或いは伝来過程で失われた可能性を考えてみるべきであろうか。挿絵にはしばしば補彩や補筆が施されており、甚だしきは下巻のうち、朝日天女が金の箱を持ち帰る場面（第一二紙）と箱を御曹子に差し出す場面（第一三、一四紙）の間に樹木を描き足し、本来は別々の挿絵を一連の場面のごとき体裁に整えている。また、本文料紙に金泥を補った箇所も多い。中巻第一七紙（デジタル画像第五七コマ）などは文字の上に金泥が乗っているさまが画像からもはっきり分かる。これらの例は本絵巻が制作時のままではないことの証左であると同時に、補修を重ねながら大切に伝えられて来た歴史を物語っている。

興味深いのは、いけのや文庫本の各料紙の端に残されていた墨書である。巻子装に修復された現在では視認できないが、絵巻の制作や修復の実態を伝える情報と思われるので、ここに報告しておきたい。

墨書は［図版1］右端のように、巻子装の糊代部分に当たる料紙オモテの右上と右中央に見られ、「い」「ろ」「は」の平仮名と漢数字とが組み合わされている。料紙ウラの右上にも同様の墨書があった［図版2］。オモテ右中央には漢数字のみを墨書する場合と、数字に「包」という一文字を加える場合が見られた［図版3］。「包」字はやや字形が崩れているが、おおむね「包」と読んで良いようであり、上巻と中巻末の料紙などには「終」字が加えられていた。判読不能箇所を除けば、オモテ右上の墨書とウラ右上の墨書とは同一内容であった。いずれの墨書も絵巻制作の時期とほぼ同じか、さほど隔たっていない印象である。

以上を一覧にしたのが本稿末の別表「いけのや文庫蔵『御曹子島渡り』データ」である。墨書は上中下巻を「い」「ろ」「は」で区別し、数字は概ね帳合に従っている。「包」の意が明確ではないが、次の挿絵の入る直前の料紙にこの文字が書かれていることから、発注もしくは修復の際に錯簡が生じないよう、各「包」ごとに管理されていた可能性が考えられる。(5)

上巻は第二六紙で終わるが、この部分は鬼どもが住む「ゐぞかしまとて、かくれなきむくりかすむしま」に御曹子が上陸した場面であり、詞書は途中で途切れている。

ける有様也。あさましや、かゝるうきめにあふ事も、前世のいんぐはめくりきて、かゝることの心ほそくておはせしか、され共心を取なをし、鬼共に仰られけるやうは、すこしのいとまをたひ給へ。竹をならしてきかせ申さんと有けれは、すこしくつろげたてまつる。そのひまにたいとう丸を取いたし、ねとりすまし給ひて、まんじゆらくといふかくをしはしふかせ給へは、

（いけのや文庫本・上巻末）

中巻冒頭は「さるほとに、おにともこれをきくよりも、竹をならすかおもしろきに、いかほともならせとて、みな〳〵しつまりて、笛をきゝてそゐたりける。御さうしは御覧して」と始まる。中・下巻とも「さるほどに」が冒頭に加えられて新たに語り起こした印象を与えるが、このため中巻は上巻と繋がりにくい。このように詞書が途切れ、接続が不自然である場合、通常は上巻末に欠落があると判断されよう。しかし、料紙の糊代部分に「十六包終」と墨書があることから、もともと（または制作時期からさほど遠くない時期に）ここで上巻が終わっていたと推測される。

中巻末尾の第一九紙は「御さうしはたゝひとり、ひろにはにおはしまし、とやせん、かくやあらましと、しはしそこにたゝすみ給ふ。大わう、ゐしやきを御つかいにて、いかにや、あしはら国のくはんきよはいつくにあるそ。見て参れと有しかは、ゐしやきはうけたまはり、ひろえんさして出けれは、もとの所に有けるを、よく〳〵見奉りてかへりける」で終わり、続く下巻は「さるほとに、大わうにかくと申けれは、大わうきこしめし、さてはふしぎのものかな。さらは出てさかもりせん。竹をも」と始まって本文は自然に流れてゆく。なお、下巻最後の挿絵の直前、第二七紙には「十六包」と墨書があり、物語は「御さうし、かつはとおきさせ給ひ、いかにやととはんとすれとも夢にてあり。（中略）むかしよりいまにいたるまて、ふうふの中ほとにせつなきことはよもあらし。かくて、ひやうほうゆへに、

日本を思ふまゝにしたかへて、げんしの御代とこそなりにけれ」と結ばれる（第三〇紙）。

以上、いけのや文庫本は三巻仕立てながら中巻が短く、下巻はかなり長い。『御曹子島渡り』の伝本は二軸（冊）または一軸（冊）本がほとんどであり、現在知られる伝本のうち、三冊本は山田平十郎旧蔵の大型奈良絵本のみである。その各冊丁数は十七丁、十九丁、十四丁で、挿絵の数も含めてほぼ均等な分量に仕立てられている（先掲「簡明目録」、『室町物語集』解題参照）。これに比して、いけのや文庫本が三巻の分量に不均衡を生じた理由は判然としないが、料紙端の墨書を含め、奈良絵本全盛期における絵巻制作の実態を考察する上でも注目すべき絵巻といえよう。

三、時代を映す絵巻―波濤図と美人図―

いけのや文庫蔵『御曹子島渡り』の挿絵には、江戸時代前期の奈良絵本・絵巻に共通する要素が看取される。波濤図を描く障子はその好例である。

御曹子の最終目的地であった喜見城については、御伽文庫本や秋田県立図書館本はいわゆるタイル風の床などで異境性を表現するに留まるが、いけのや文庫本や九曜文庫本、支子文庫本等は波濤を調度品に描く。いけのや文庫本の喜見城は、障子や塀までがあたかも青磁を思わせるような彩りの波濤図で荘厳されている［図版４］。

同様の波濤図は、異境の象徴として十七世紀に商業的に量産された奈良絵本・絵巻に頻出する。たとえば酒呑童子の物語では、ニューヨーク公共図書館スペンサー・コレクション蔵『大江山酒呑童子』（三軸、整理番号№96）や国会図書館蔵『伊吹とうし』（一軸、DOI:10.11501/1288381）、國學院大學蔵『酒呑童子絵巻』（一軸、ID:LDL000040）をはじめ、しばしば童子は波濤の障子で飾られた邸内で酒宴に興じている。とくに国会本はいけのや文庫蔵『御曹子

島渡り』の青磁色の波濤図に近似する。

異境表現としての波濤図は、『枕草子』以来、宮中の調度として諸文献に記される「荒海の障子」が源流かと推測される。海中に手長足長を描くこの奇妙な障子をめぐる言説は謡曲「大江山」や慶應義塾大学蔵『しゆてん童子』（三巻）にも見えているが、後者では泥酔した童子はよろめきながら座敷を立ち、「いつしか、めに見えぬ、おにのまの、あらうみのしやうし、をしたてゝ、よるのふしとにこもりにけり」と語られる。(6)

波濤が象徴する異境は酒呑童子の屋形に限らない。国文学研究資料館蔵『うらしま』（一軸）の竜宮は波濤の障子で飾られ[図版5]、同じく『咸陽宮』（二冊）では人物の背後に波濤の衝立が置かれている[図版6]。海の見える杜美術館蔵『天狗の内裏』でも波文の調度が天狗たちの居所を彩るなど、類例は枚挙にいとまがない。

とりわけ興味深いのはチェスター・ビーティー・ライブラリィに所蔵される『十二類絵巻』（三軸）である[図版7]。物語末尾、主人公の狸は人間の僧侶の手で得度するが、その部屋の障子には波濤図と風景図とが描かれる。ここは作中で唯一、人間と異類異形の世界が交錯する場面であり、二種類の障子はそれを象徴する機能を果たしていよう。(7)

波濤図は奈良絵本や絵巻の世界に留まらず、近世前期の版本にも足跡を残した。延宝四年（一六七六）刊『はちかづき』の挿絵では臨終間近の母君と鉢を頂いた姫とが向かい合って座り、周囲に乳母たちや父君が配されるが、母君の背後には波濤図の屏風が描かれ、両親の座す上畳の縁にも波濤の文様が見られる[図版8]。これについては「これから姫君に降りかかるさまざまな苦難や、姫君を残して他界しようとする母君の胸の内」「母君がこれから逝こうとする補陀落海」の暗示的表現とし、本作品における水は「作中人物の心中を表す重要なモチーフ」とする見解もある。(8)だが、延宝四年といえばまさに奈良絵本・絵巻の全盛期であり、そこには異境表現として繰り返し波濤図が描かれていた。従って、延宝四年版『はちかづき』の波濤図もまた、人知を超えた力の発露の表象として理解できよう。

いけのや文庫蔵『御曹子島渡り』の挿絵には、波濤図のほかにも江戸時代前期の奈良絵本・絵巻に特徴的な表現が見られる。馬人島の場面を参照してみよう。御曹子が島に到着すると、「たかさ十ちやうはかりなるもの、二三十人いてきたりしか、こしよりうへはむまにてあり、こしより下は人なりしか、こしのあたりを見給へは、たいこをつけてあなたこなたとしける」島人たちが出迎えた。彼らの言によれば、この島は「王せん嶋と申て、かくれなきむま人しま」で、腰の太鼓は転んだ際に叩いて助けを呼ぶ必須の道具だという。諸本いずれも渚で御曹子と対面するという近似の構図をとるが、いけのや文庫本は馬人の数が多く、豪華な一図となっている。注目されるのは、右手を曲げ、左手は袖の内側に隠しながら御曹子の方へ差し伸べて、見返り美人さながらに彼を振り向く馬人のすがたである［図版9］。こうした挙措は「寛文美人図」など江戸初期風俗画の美人図に非常に近い。美人図の女性たちは左手の先を袖内に隠し、右手で着物の褄をとり、あるいは恋文などを持ちながら、ひとり立って前方を見つめるという特徴を持つ。同様の挙措は江戸時代前期の絵巻や奈良絵本に見られる絵画表現であり、ニューヨーク公共図書館スペンサー・コレクション蔵『鼠草紙出世物語』（一軸、江戸時代前期写）や天理図書館蔵『鼠の草子別本』（一軸、江戸時代初期写）もその一例である。(9)

この馬人とよく似た挙措としては、出光美術館蔵「花持美人図」（『江戸の美人画　寛永・寛文期の肉筆画』、図版№120、学習研究社、一九八二年）や、同じく江戸初期風俗画の「舞踊図」（京都市、重要美術品）なども想起されよう。前者の女性は右手を軽く曲げて花を持ち、左手は横へ伸ばしてやや斜め後ろを振り返る。舞踊図の女性は楽に合わせ、両手を広げて舞う。しなやかなその容姿は、馬人が太鼓を身に着け、両手を横へ広げたさまによく似る。すなわち、いけのや文庫本が描く馬人は、江戸時代前期の商業的に量産された奈良絵本・絵巻と共通する特色を有しているのであり、頭部さえ人間の女性であったならばこうもあろうかと思われる「馬人美人図」なのであった。

近世初期風俗画に共通する表現は、いけのや文庫本の末尾、御曹子が無事に帰国して秀衡と再会する場面にも看取される。縁側に列座する家臣たちの装束には背中から腰にかけて巨大な松が配され、あるいは白い貝に大きな蟹、鱗文に海老が散らされているが、無論、これらは『見聞諸家紋』などの家紋資料には見当たらない。同趣の斬新かつ大柄の文様を用いた意匠は、寛文美人図の女性たちがまとう「寛文小袖」の特徴と合致する。実際、松や蟹、海老を大胆に用いた意匠は寛文六年（一六六六）刊の小袖雛形本『御ひいながた』に見えており、個人蔵「桜狩遊楽図」（寛永期作、重要美術品）では三味線を奏でる女性が大きな海老を散らした小袖に身を包む。

このように、いけのや文庫蔵『御曹子島渡り』は江戸時代前期に共有された異境表現を用いつつ、大胆かつ奇抜な小袖が歓迎された当代の空気をもよく伝える絵巻といえよう。

四、小人国の表象

いけのや文庫本によれば、御曹子の渡海は「ゑそかしま大てしま、はらねこしま、まつしま、うし人しま、をかのしま、とら嶋、まつまい嶋、かふどしま、ゆみしま、たけ嶋、もろかしま、いわう嶋、きかいか嶋、けんかいか嶋、ひるか嶋、たての嶋」を通り過ぎ、波路を揺られること七十五日目にして馬人島へ到着、その後は裸島、女護島へと次々上陸し、珍奇な島人たちとの交流を経る旅となった。続いて御曹子がまたもや珍しい島へと舟をつけると、渚には背の高さ一尺二寸の小人たちが現れた。これこそ「ちいさこ島」であった。

せいのたかさは一しやく二すん、あふきのたけほとの人、三十人はかりいてきたりたり。御さうし御らんして、

このしまの名をはなにといふそととはせ給へは、しま人まなこにかとをたて、なにをいふそや、くはんきよ、ゑ

そか嶋にかくれなきちいさこしまとはこの事也。ほさつしまとも申なり。　（いけのや文庫本）

挿絵では小人たちはいずれも中国風の装束を身につけており、その数は二十五人にのぼる。現在、画像を確認できる諸本中では最多である。これに対して、秋田県立図書館本には弧を描くように座して連歌を楽しむ小人たちが十六人、その周囲に二人組み、三人組みの小人が配される。兵庫歴史博物館本では九人、御伽文庫本では十三人、支子文庫本では一列横隊で七人が描かれる。

いけのや文庫本が二十五人もの小人を描いた理由は、恐らく次の一節「二十五の菩薩たち」に基づくものであろう。二十五菩薩影向の島なればこそ、小人たちの数までも二十五という数字が意識されたに違いない。

ちいさこしまのいはれと申をかたつてきかすへし。あまりにせいかちいさくしてそれにつけてそ申ける。また、ほさつ嶋とは、夜三とひる三と、なんはうふたらくせかいより、廿五のほさつたち、十二のきかくをそうしつゝ、くはんけむをめされてやうかうなり、いきやうくんし、花ふり、しうんたちて、しゆせうなり。しかるゆへに、この嶋をほさつ嶋とは申なり。人のしゆみやうもなかくして、八百まていけるなりとそ申しける。

（いけのや文庫本）

そして、右の一節からはもう一つの疑問が浮かび上がって来る。いったいなぜ、小人島は「菩薩島」という異名を有しているのであろうか。

古来、小人の住む異境は洋の東西を問わず諸書に散見するが、中近世日本において広く受容されたのは中国伝来の知識であった。[10] それによれば小人たちは類いまれな能力に恵まれ、あるいは長い寿命を保つものの、鶴または鵠に呑まれてしまうことが唯一の弱点であった。その難を避けるために彼らは単独行動をとらず、必ず連れ立って移動するという。俳諧では鶴と小人とが付合として定着するほど、この伝承は人々にとって耳近い異境譚であった。

大小　刀脇ざし　暦（中略）神異経に西北ノ海外ニ有レ人長二千里といへり。斉桓公猟して一の鵠を得たり。喙中に長三寸三分の人出たり。大小の神祇ともいへり。人も大智あり小智あり（延宝四年刊『俳諧類船集』「大小」）

鶴　付心　御所ノ座（中略）　小人　（元禄五年刊『俳諧小傘』鶴）

小人島の伝承はしばしば類書にも記録された。『太平広記』では小人たちはその名も「鶴民」という国に住み、ともすれば鶴に捕食されるという運命にあった。『太平御覧』「短絶域人」の項にもさまざまな小人の記録が載っているが、そこに引用された逸書『詩含神霧』によれば小人は長九寸、『神異経』によれば長七寸、「鵠国」に住んで礼節を弁え、経論を重んじていたという。

西北海戌亥之地有鶴民國、人長三寸、日行千里而歩疾如飛、毎為海鶴所呑、其人亦有君子、小人如君子、性能機巧、毎為鶴患（中略）出窮神秘苑

（『太平広記』巻四八〇「鶴民」）

神異経曰（中略）又曰西海之中有鵠國、男女皆長七寸、自然有禮、好經論跪拝、壽三百歳、人行如飛日千里、百物不敢犯之、唯畏鵠鵠遇呑之、上壽三百歳、在鵠腹不死而鵠一擧千里張華注曰、此陳章對齊桓公云、西海之外、鵠國男女皆七寸也、

（『太平御覧』巻三百七十八「人事部十九」）

万暦三十七年（一六〇九）刊『三才図会』人物十四巻「小人国」では小人たちは六人で横隊を組み、周辺にも二人、三人が組になって群行している。ただし、鶴は描かれていない。挿絵上部に「東方有／小人國／名曰竫／長九寸／海鶴遇／而呑之故出則／郡行」と記載がある（国会図書館本 http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2574375/116）。

一方、本稿冒頭に引用した『異国物語』の「小人国」では『三才図会』よりもさらに挿絵が簡略化されて小人たちは一列横隊の集団のみとなり、彼らを頭上から見下ろす鶴が新たに加えられている。パリ本『異国物語』もこれに近く、本文には「此国東方に小人国あり、人のたけわつかに九寸、海鶴常にかけりてやゝくらふ、このゆへに国人ゆく

ときは大勢むらかりつれてゆくと云なり」と見える。明代日用類書の諸本では一列横隊の小人たちの頭上を大きな鶴が飛翔しており、明らかにこちらの方が『異国物語』の典拠と了解される。本文についても、『異国物語』はたとえば『妙錦萬寶全書』巻之四の諸夷門「小人國」に見える「東方有小人／國名曰竫身／長九寸海鶴／遇而呑之不／敢孤行」（『中國日用類書集成』第十二巻、汲古書院、二〇〇三年）などを参照して和らげたと思われる。九州大学支子文庫本の『御曹子島渡』「小人国」では一列横隊の小人たちが描かれ、『三才図会』の図様との親近性が指摘されているが、[11] 横隊の小人たちのみを描く点では『三才図会』よりも日用類書の方が『御曹子島渡り』に近い。

とはいえ、日用類書の本文中には仏教色は盛り込まれていない。辛うじて『太平御覧』「自然有禮、好經論跪拜」という一節が小人たちの信心深さを垣間見せるものの、小人国と菩薩とが結びつくような例はなかなか見出せない。

『御曹子島渡り』が伝える異名「菩薩島」の淵源はさまざま考えられようが、ひとつの可能性として明代日用類書における本文の混乱に注目してみたい。日用類書は多種多様な版種があり、小人国の異名やその身の丈を記す表現にかなり混乱を来している。その過程を追うために、今一度、該当部分の変遷を確認しておこう。

小人国の記事が載る古例には、まず『山海経』大荒東経が挙げられる。

有小人國、名竫人。　（『山海経』大荒東経）

「竫」は本来、安らか、正しい、善いといった意であるが、『山海経』には諸注が施され、竫人のさまは夙に類書にも収録された。たとえば『初学記』巻十九・人物下「短人第五」は「蔡賦巴馬　郭讚竫人」の対偶を挙げ、後者の注記として「竫」の音が「浄」であると注記する（郭璞讚曰、僬僥極麽、竫人又小竫、音浄）。『太平御覧』「短絶域人」の項も「東北極有人、名竫音靖人、長九寸」と同様の注記を施す。[12]

下って、明代の学者田藝蘅が著した『留青日札』巻之十五には「竫人」が立項されており、冒頭に「郭璞讚、竫人

小人也、音浄」と記載がある。小人国の異名や位置、風俗は時代が下るにつれて縮小および固定化されてゆき、中近世日本においても『三才図会』や明代日用類書が伝える小人国の記述が人々に共有の知識となった。

その日用類書の版面に存したかなりの「揺れ」が、新たな伝承生成の土壌を提供したように思われる。この可能性を探るため、「揺れ」の具体相を一見してみる。

万暦年間刊、著撰者不明『新刊天下民家便用萬錦全書』八巻「諸夷門」（仁井田陞旧蔵。『明代通俗日用類書集刊』⑬所収。以下、集刊と略称）は小人国の異名を「竫」と伝え、彼らの身の丈は「長九寸」であったと記す。『太平御覧』以来の知識が誤解の余地なく伝わってこよう。

東方有小人國／名曰竫長九寸／海鶴遇而呑之　（『新刊天下民家便用萬錦全書』）

また、万暦年間の徐會瀛編『新鍥燕臺校正天下通行文林聚寶萬巻星羅』巻之十「諸夷門」諸夷雑誌（集刊⑦）には「東方有小人／國長九寸海／鶴遇而呑之／不敢孤行」とあって、「竫」の語こそ見えないが、ほぼ右の記事に近い。これに対して万暦三十八年（一六一〇）刊、徐企龍編『新刻全補士民備覧便用文林彙錦萬書淵海』五巻「諸夷雑誌」（集刊⑩）では「長九寸」が「身長九寸」という表現に変化している。従来は「長九寸」とあった表記に「身」という一文字が紛れ込むのである。

東方有小人／国身長九寸／海鶴遇即呑／之不敢孤行　（『新刻全補士民備覧便用文林彙錦萬書淵海』）

さらには崇禎十四年（一六三三）序刊、鄭尚玄訂『新刻人瑞堂訂補全書備考』巻之七「外夷門」外夷土産人民図（集刊⑮）が「東方有小人／小人身長九／寸海鶴鳥呑／之不敢独行」と記すごとく、小人の「身長」が九寸であることを明記する例も現れる。

「身」という文字が流入した痕跡は、万暦二十五年（一五九七）刊、著撰者不明『新鍥全補天下四民利用便觀五車

抜錦』巻之四「諸夷門」諸夷雑誌（集刊⑤）などから想像される。その本文には以下のように見える。

東方有小人／国名曰竫身／長九寸海鶴／遇而呑之不／敢孤行　（『新鍥全補天下四民利用便觀五車抜錦』）

ここは正しくは「竫人」とすべきところであるが、「人」が脱落しているため、「竫身」とも読まれかねない。同様の表現は万暦三十五年（一六〇七）刊、武緯子補訂『新刊翰苑廣記補訂四民捷用學海群玉』十巻「外夷雑誌蠃虫録」（集刊⑧）や、万暦四十年（一六一二）刊、劉子明輯『新板全補天下便用文林妙錦萬寶全書』四巻「京本蠃蟲録〇外夷雑誌」（集刊⑩）などにも見出される。

それのみならず、「竫」が「浄」に変じてしまった例も散見する。たとえば万暦四十二年（一六一四）刊、朱鼎臣編『新刻鄴架新裁萬寶全書』巻之四「諸夷雑誌」（仁井田陞旧蔵。集刊⑪）や京都大学谷村文庫蔵『（新刻）群書摘要士民使用一事不求人』巻之六・諸夷形像「小人國」の記事は、「竫」ではなく「浄」と読めるのではなかろうか［図版10］。万暦四十二年（一六一四）刊、徐啓龍編『新刻捜羅五車合併萬寶全書』巻之四「諸夷雑誌」（集刊⑫）などもこれに同じい。この本文表記では、読者が小人国の異名を「浄身」と理解する蓋然性もあろう。

東方有小人國／名曰浄身長九／寸海鶴遇而呑／之不敢獨行　（谷村文庫本）

このような本文の揺れから生じた「浄身」という表記が、仏教思想を背景に「菩薩」への連想を呼び起こしたとすれば、明代日用類書の享受を考える上でも興味深い事例となろう。

仏教語では「清浄」は単に「浄」とも称し、不浄を去った浄潔なさまを指す。その種別は諸経に説かれているが、「浄身」という語彙は『大般涅槃經』ほか諸経典に見え、しばしば清浄を成就した菩薩の表現として現れる。

菩薩清淨身　光明無有量　（『方広大荘厳経』巻七）

菩薩住七地。成就深淨身口意業。是菩薩所有不善業隨煩惱者。悉已捨離。所有善業常修習行。

（『大方広仏華厳経』巻第二十五）

なかんずく注目されるのは『法華経』の所説である。巻第六「法師功徳品」では仏が常精進菩薩らに向かい、この経典を受持し、読誦し、解説し、書写する者は六根清浄を得ると説く。その偈にいう。

若持法花者　其身甚清淨（若し法華経を持たばその身清浄なること）
如彼淨琉璃　衆生皆憙見（彼の浄玻璃の如くにして衆生は皆見んことを憙わん）
又如淨明鏡　悉見諸色像（また浄明なる鏡に悉く諸の色像を見るが如く）
菩薩於淨身　皆見世所有（菩薩は浄身において皆世の所有るものを見るに）
唯獨自明了　餘人所不見（ただ独り自ら明了にして余人の見ざる所ならん）

（『法華経』法師功徳品）

ここに「浄身」と「菩薩」の語が併記されている。しかもこの浄明鏡をめぐる一節は歌題として定着した。『発心和歌集』四三番はその好例である。

又如淨明鏡　悉見諸色像　菩薩於淨身　皆見世所有

（『発心和歌集』）

くもりなきかがみのうちぞはづかしきかがみのかげのくもりなければ

このほかにも浄明鏡の一節は『長秋詠藻』『拾遺愚草』をはじめ、『新和歌集』巻第五「釈教」や『続亜槐集』、『松下集』六「詠法花経廿八品和歌」、『下葉集』雑「法師功徳品」、『黄葉集』巻第九「釈教部」、『年代和歌集』「建武三年住吉社法楽和歌」等々に詠まれている。

法師功徳品　又如淨明鏡、悉見諸色像

（『長秋詠藻』下・四二一番）

にごりなくきよき心にみがかれて身こそますみの鏡なりけれ

右の俊成詠は中世最大の類題集『夫木和歌抄』巻第三十四・雑部十六にも収録された。また、一首は『法華和語記』

『法華訳和集』『轍塵抄』等にも収載されており、これが中世の法華経談義の場で用いられ、学僧たちにとっても周知の詠歌であったことを知る。『冥途蘇生記』や延慶本『平家物語』巻第六「十四　大政入道慈恵僧正ノ再誕ノ事」などでは尊恵の前で閻魔王が「如浄明鏡」の一節を読誦したと伝えるなど、「又如浄明鏡　悉見諸色像　菩薩於浄身　皆見世所有」云々は世流布の文句であった。(13)

加えて、『法華経』にはより密接に「浄身」と「菩薩」が結びつく例がある。それは冒頭の序品において日月灯明仏から記を授けられた徳蔵菩薩をめぐる一節であり、偈には「号して曰く浄身となす」という。

是徳蔵菩薩（この徳蔵菩薩は）
於無漏実相（無漏の実相において）
心已得通達（心已に通達することを得たるをもって）
其次当作仏（その次にまさに仏となるべし）
号曰為浄身（号して曰く浄身となす）
亦度無量衆（また無量の衆を度せん）

（『法華経』序品）

この徳蔵菩薩とは、ほかならぬ二十五菩薩の一であった（『往生要集』巻下・第五「念弥陀利益者」、「二十五菩薩和讃ほか）。『御曹子島渡』の小人島には清浄な智恵に通じた「浄身」なる「徳蔵菩薩」が来迎していたことになる。

室町物語の成立圏において明代日用類書が享受され、そこにはこれらの俗書に特有の表記の揺れがあったからこそ、「浄身」から清浄なる菩薩身の連想がもたらされたのかも知れない。

五、おわりに

みてきたように明代日用類書は版種が多様かつ複雑であるが、列挙された国々には御曹子が立ち寄った島を彷彿させる伝承を持つものもある。試みに万暦二十七年（一五九九）刊、余象斗編『三台萬用正宗』から抄出してみよう。

まず、古来、名高い「女人国」がある。本文には「其婦居東北海角、無男子、對南方照井則有孕、生下者具女也」と記され、挿絵には井戸を覗き込む二人の女が描かれる。

次に、「道明國」という国は衣服をまとわぬ人々の国であった。本文には「此人不着衣服、見着衣者即笑、無塩鉄、常以竹弩射鳥而食、披髪無五谷」という。『御曹子島渡り』の裸島を想起させよう。また、馬の脚をもつ人々の国もあり、名を「丁靈國」といった。本文には「在海内居、膝下生毛馬蹄、善走、自鞭其脚、一日行三百里、至應天、馬行二年」と説明が付されている。馬行二年という記述はいかにも大陸らしく、対照的に『御曹子島渡り』は海に四方を囲まれた日本に似つかわしい。多くの場合、馬人たちは頭は馬、体は人間という二足歩行のすがたであったが（いけのや文庫本・九州大学本・石川本・御伽文庫本等）、それとは逆に頭は人、体は馬で四足歩行のすがたを語る伝本もある（秋田県立図書館本）。

明代日用類書とは、小人の国、女人の国、裸の人々や馬の脚を持つ人々が暮らす国をも列挙する通俗書であった。舶載された版本によってもたらされる不可思議な国々の風俗は、当時の日本人を惹きつけてやまなかったと推測される。そのような時代の空気は『御曹子島渡り』においても共有されていたのではなかろうか。本稿冒頭で述べたとおり、明代日用類書は仮名草子『異国物語』や奈良絵本『山海異物』を生み出す土壌となっていた。これらは日用類書

の挿絵や記事をほぼそのまま踏襲するかたちで成立したのであったが、日用類書特有の本文の「揺れ」もまた、中近世日本の文芸に影響を及ぼした可能性を視野に入れるべきであろう。

蓋し、室町物語や奈良絵本の生成・享受圏と、明代版本の享受圏との距離は存外に近い。今後、明代版本がこの時代の文芸に果たした役割を検証し、さらなる考究を進める必要がある。

〔注〕

（1）本書の閲覧に際しては、フランス国立図書館写本室日本部門のヴェロニック・ベランジェ氏に格別のご高配を賜った。同館電子図書館 gallica.bnf.fr および吉田幸一編『異国物語』（古典文庫、一九九五年）参照。以下、本稿で引用する文献は私に句読点や傍線を付し、改行箇所を／で示した場合がある。

（2）『明代通俗日用類書集刊』（中国社会科学院歴史研究所文化室、西南師範大学出版社、東方出版社、二〇一一年）、『中国日用類書集成』（汲古書院、一九九九～二〇〇四年）など参照。このほか、漢籍の引用は原則として四部叢刊による。

（3）支子文庫本は国文研にマイクロフィルムとモノクロのデジタル画像を所蔵、カラー画像は九州大学から公開中。九曜文庫本は中野幸一編『奈良絵本絵巻集』11（早稲田大学出版部、一九八八年）所収。秋田県立図書館本は複数の翻刻紹介があるが、挿絵のカラー画像を含めて同館が全文画像を公開した。

（4）初度の絵巻閲覧は久保木秀夫氏（当時、国文学研究資料館助手）にお誘い頂いて眼福を得た。その折には横浜開港資料館の石崎康子氏と、松本洋幸氏（現在は大正大学勤務）に大変お世話になり、石崎氏には今回も本絵巻とのご縁を繋いで頂いた。お三方に篤く御礼申し上げる。絵巻の撮影は、稿者が参加する当館の歴史的典籍

NW事業・国際共同研究「境界をめぐる文学―知のプラットフォーム構築をめざして―」（二〇一五年～二〇一七年度）による。

（5）二〇一七年六月十七日、右の「境界」研究会を開催し、いけのや文庫のご当主、石川透氏、鈴木彰氏と立教大学の学生の方々もお招きして本絵巻の展観を行った。石川氏はご所蔵の『御曹子島渡り』をお持ち下さり、さらに有意義な会となった。席上、墨書「包」が意味するところについても意見が交わされたが、ほかに類例が確認できず、当面はその折に鈴木彰氏が出されたご意見に従っておきたい。なお、本絵巻の翻刻や系統論等は立教大学チームにお任せしたので併せてご参照頂きたい。

（6）徳川美術館蔵『酒呑童子絵巻』も波濤の襖絵を持つ。龍澤彩「大名家における英雄譚絵巻の所有―江戸時代の酒呑童子絵巻」（Anthropoetics: the Journal of Generative Anthropology, 2016）参照。同氏は波濤の障子と荒海の障子の関連性を指摘されている。文芸に散見する荒海の障子については先掲『山海異物』に関する拙稿参照。

（7）二〇一七年九月、海の見える杜美術館で『天狗の内裏』等を調査させて頂き、谷川ゆき氏をはじめ学芸員の方々にお世話になった。当該の挿絵は同館ホームページにも掲載されている。また、同年八月、チェスター・ビーティー・ライブラリィにて行われたシンポジウムおよび資料調査では同館東アジアコレクション学芸員のメアリー・レッドファーン氏にお世話になり、本稿の図版掲載についても格別のご高配を賜った。

（8）相田愛子「学芸員コラムれきはく講座第67回：館蔵「鉢かづき(延宝四年絵入本)」とその画中画について」（兵庫歴史博物館ホームページ、二〇一五年一〇月一五日）参照。

（9）拙稿「鼠の祝言―視覚文化の中の御伽草子―」（『アメリカへ渡った物語絵　絵巻・屏風・絵本』ぺりかん社、二〇一三年）参照。なお、いけのや文庫本の冒頭に登場する家臣たちの衣装には後述のように寛文小袖風の大

柄のほか、青海波に二つ引き両や、五枚笹に葵に似た紋が配され、源氏を連想させる。

（10）前田金五郎「『小人嶋』考—西鶴語彙管見—」（『国語と国文学』第三一巻第八号、一九五四年八月）、米井力也「小人島ニ至ル時」（『国語国文』第七二巻第三号、二〇〇三年三月）、花田富二夫「仮名草子と異国」（『江戸文学』第三二号、二〇〇五年六月）、鈴木広光「「小人島」考・続貂」（『叙説』三三号、二〇〇六年三月）、岩波書店『文学』二〇一五年一一・一二月号「特集 近世の異国表象」等参照。秋田県立図書館本『御曹子島渡り』が小人国を連歌島とも称したのは、天神ゆかりの数字「二十五」からの連想か。

（11）金沢英之『義経の冒険 英雄と異界をめぐる物語の文化史』（講談社選書メチエ、二〇一二年）参照。『訓蒙図彙』巻之四「小人（せうじん）」には小人四人が一列に描かれ、「俗云こびと小人國（こく）也短人國（たんじんこく）同」と注記がある。御曹子が通過した島々の説話背景やイメージ連関については保立道久「虎・鬼ヶ島と日本海海域史」（『物語の中世—神話・説話・民話の歴史学』東京大学出版会、一九九八年）参照。また、徳田和夫『お伽草子研究』（三弥井書店、一九八八年）、大谷節子『「張良一巻書」伝授譚考—謡曲『鞍馬天狗』の背景」（『室町藝文論攷』三弥井書店、一九九一年）等参照。

（12）北方に住む長九寸の「竫人」は柳宗元「行路難」にも詠まれるなど世に知られるところとなった。

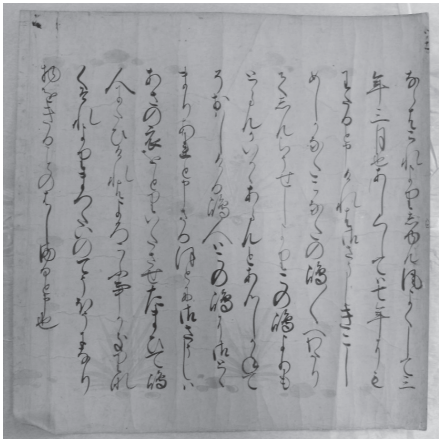
須臾力尽道渇死　狐鼠蜂蟻争噬呑
北方竫人長九寸　開口抵掌更笑喧

（『柳宗元集』巻四十三・古今詩「行路難」）

（13）延慶本は「菩薩於浄身」を「菩薩精進ニ持テ」とする。『冥途蘇生記』は清澄寺本が早くから知られ（『宝塚市史』第四巻資料編Ⅰ、一九七七年）、錦仁氏ほかによって諸本の発見と享受相の研究が進んでいる。

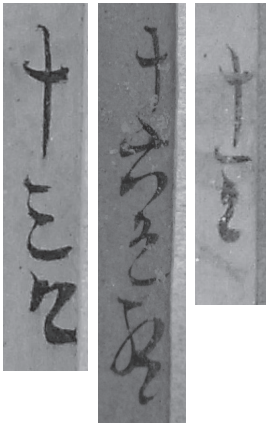
本稿は国文学研究資料館の歴史的典籍ＮＷ事業国際共同研究「境界をめぐる文学―知のプラットフォーム構築をめざして―」（二〇一五～二〇一七年度）および科学研究費補助金・基盤研究Ｃ「中・近世日本における中国明代日用類書の変成―異類・異界表現を中心に―」（研究代表者・齋藤真麻理／二〇一四～二〇一六年度）の成果である。

図版 2：いけのや文庫蔵『御曹子島渡り』

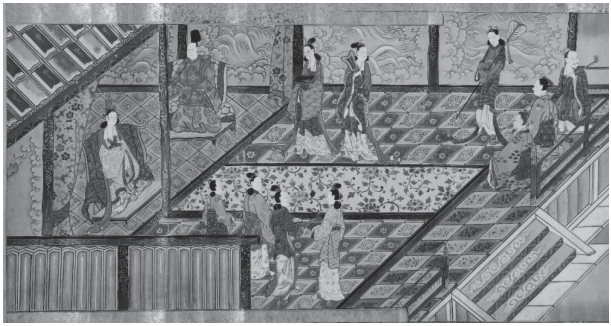


図版 1：いけのや文庫蔵『御曹子島渡り』
（図版 1～4、9 は禁無断転載）

図版 4：いけのや文庫蔵『御曹子島渡り』。喜見城のさま。



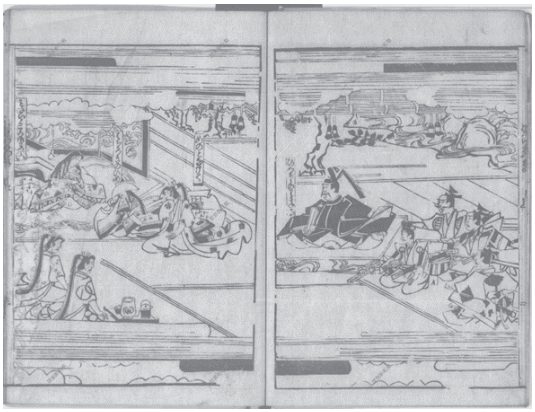
図版 3：いけのや文庫蔵『御曹子島渡り』。修復前の墨書（拡大）。右から上巻 18 紙、26 紙、下巻 22 紙。



図版 5：国文研蔵『うらしま』
（国文研データセット　DOI:10.20730/200017771）

図版 6：国文研蔵『咸陽宮』
（国文研データセット
DOI：10.20730/200016472）

図版 7：チェスター･ビーティー･
ライブラリィ蔵
『十二類絵巻』
CBL J 1154 © The Chester Beatty Library & the HUMI Project, Keio University



図版 8：延宝四年刊『はちかづき』（西尾市岩瀬文庫蔵。
国文研データセット　DOI：10.20730/100066698）

図版 10：京都大学谷村文庫蔵『（新刻）群書摘要士
民使用一事不求人』巻之六「小人国」
（京都大学貴重資料デジタルアーカイブ）

図版 9：いけのや文庫本「馬人島」

いけのや文庫蔵『御曹子島渡り』データ

①～③修復後のデータ④～⑥修復前のデータ

	①寸法	②詞／絵	③詞書冒頭(絵)	④オモテ 右上墨書	⑤オモテ 右中央墨書	⑥ウラ右上墨書
上巻（紙高33.1×全長1291.1㎝）						
表紙	36.1㎝					
見返し	36.8㎝					
第１紙	49.6㎝	詞	さるほとに御さうしはひてひらをめされ			
第２紙	50.0㎝	絵	(秀衡の屋形)	いノ一ノ二		
第３紙	49.8㎝	絵(続)	(屋形内で対面する御曹子と秀衡)	いノ二		
第４紙	50.0㎝	詞	御さうしこのよしきこしめしとやせ	いノ三	二包	
第５紙	50.0㎝	絵	(船頭に声をかける御曹子)	いノ四		
第６紙	50.4㎝	詞	御さうしはきこしめしよのふねはほし	いノ五		
第７紙	50.4㎝	詞	こ／＼そゑそかしま大てしまはらね	いノ六	四	いノ六
第８紙	24.2㎝	詞	はなにそとゝひ給へはこれは太こと申	いノ七	五包	
第９紙	49.8㎝	絵	(むま人島へ上陸した御曹子)	いノ八		いノ七
第10紙	49.8㎝	絵(続)	(むま人島の面々)			(判読不能)
第11紙	50.0㎝	詞	もつともと仰られてしはしかほと物	いノ九	六	いノ九
第12紙	50.5㎝	詞	風ふけはさむくはなきかはたか嶋	いノ十	七	いノ十
第13紙	32.0㎝	詞	ならはこれよりじゆん風よくして三	いノ十一	八包	いノ十一
第14紙	49.6㎝	絵	(はだか島へ上陸した御曹子)	いノ十二		
第15紙	49.6㎝	絵(続)	(はだか島の面々)	いノ十三		いノ十三
第16紙	50.4㎝	詞	さるほとに御さうしはあんしかねて	いノ十四		(「四」のみ判読可)
第17紙	50.2㎝	詞	ひにいふやうは三百年かそのさきに	いノ十五	十	いノ十五
第18紙	17.8㎝	詞	ならすかおもしろさにしはしゆるし申	いノ十六	十一包	いノ十六
第19紙	49.4㎝	絵	(にょうごが島で笛を吹く御曹子)	いノ十七		(判読不能)
第20紙	50.0㎝	絵(続)	(にょうごが島の面々)			
第21紙	50.0㎝	詞	さるほとに御さうしはたはかりたると	いノ十九	十二	いノ十□(虫損)
第22紙	50.2㎝	詞	そのかたより吹くる風をはなんふうと	いノ廿	十三包	いノ廿
第23紙	50.0㎝	絵	(ちいさこ島に上陸した御曹子)	いノ廿一		
第24紙	50.6㎝	詞	ちいさこしまのいはれと申をかたつて			
第25紙	50.3㎝	詞	とかれたりらうりくとくあんをんらく	いノ廿三	十五	いノ廿三
第26紙	24.6㎝	詞	ける有様也あさましやかゝるうきめにあ	いノ廿四	十六包終	いノ廿四
第27紙 (白)	19.0㎝					
中巻(紙高33.1×全長953.2㎝)						
表紙	36.0㎝					
見返し	36.8㎝					
第１紙	49.8㎝	詞	さるほとにおにともこれをきくよりも	(判読不能)		ろノ一
第２紙	50.4㎝	詞	一万ゆしゆんふかさも一まんゆじゆん	ろノ二	二	
第３紙	50.4㎝	詞	さらになし御さうしはこりをとりしゆ	ろノ三	三	ろノ三
第４紙	34.0㎝	詞	やうのくろかねのさくをふりおなしく	ろノ四	四包	ろノ四
第５紙	50.0㎝	絵	(ゑぞが島に到着した御曹子)	ろノ五		ろノ五
第６紙	50.4㎝	詞	かれらかせいを見給へは十七八丈に見	ろノ六	五	ろノ六
第７紙	28.6㎝	詞	しきとはしたけれと竹をならすか		六包	ろノ六
第８紙	50.2㎝	絵	(鬼たちを前に笛を吹く御曹子)	ろノ七□□(破損)		
第９紙	50.0㎝	絵(続)	(笛に聞き惚れる鬼たち)			
第10紙	50.2㎝	詞	あるおにともかいふやうはこれほとお		七	ろノ九
第11紙	21.4㎝	詞	有様おそろしきことかきりなしもとよ	ろノ十		ろノ十
第12紙	49.6㎝	絵	(朝日天女と出会う御曹子)	ろノ十		
第13紙	50.0㎝	絵	(大王の屋形)		ろノ十一	ろノ十一
第14紙	49.6㎝	絵(続)	(笛を吹く御曹子)			ろノ十二
第15紙	50.6㎝	詞	大わうつく／＼ときゝ給ひなのめなら	ろノ十三	九	ろノ十三
第16紙	50.4㎝	詞	てきたることけふのゑしきにしたけ	ろノ十四	十	ろノ十四

渡海の絵巻（齋藤）

	①寸法	②詞／絵	③詞書冒頭(絵)	④オモテ右上墨書	⑤オモテ右中央墨書	⑥ウラ右上墨書
第17紙	50.2cm	詞	しおつるものならはけふのゑしきと	ろノ十五	十一包	ろノ十五
第18紙	50.0cm	絵	(大王に武芸を披露する御曹子)			
第19紙	24.4cm	詞	御さうしはたゝひとりひろにはにおはし	ろノ九	十二包終	
第20紙(白)	20.2cm					
下巻(紙高32.8×全長1585.8cm)						
表紙	34.0cm					
見返し	34.6cm					
第１紙	50.0cm	詞	さるほとに大わうにかくと申けれは大		二	
第２紙	50.4cm	詞	きよは竹をならせと仰けれは御さう		二	はノ二
第３紙	50.4cm	詞	ねからあやをりて一かさね十二ひとへを	はノ四	三	はノ四
第４紙	27.2cm	詞	とこゝろか雲井にあくかれてかくは	はノ五	四包	
第５紙	49.8cm	絵	(大王の屋形)			(判読不能)
第６紙	50.0cm	絵(続)	(大王と朝日天女の前で笛を吹く御曹子)	はノ七		(判読不能)
第７紙	50.0cm	詞	しゆもなかはに大わうは御ざしき	はノ八	五包	はノ八
第８紙	48.6cm	絵	(朝日天女と語り合う御曹子)	□□		
第９紙	50.4cm	詞	天女はきこしめしなにことなりとも	はノ十	六	
第10紙	51.0cm	詞	こしめしこゝにひとつのたとへあり		七	
第11紙	50.8cm	詞	をめくらし給ひてかのまき物を			
第12紙	49.2cm	絵	(箱を手に戻る朝日天女)			
第13紙	50.8cm	絵	(箱を御曹子に差し出す朝日天女)			十□(四カ)
第14紙	49.8cm	絵(続)	(庭の景色、銀の月)			
第15紙	50.0cm	詞	さて御さうしにかくと仰けれは御さ			
第16紙	50.4cm	絵	(室内で御曹子を見守る朝日天女)	(判読不能)		
第17紙	50.0cm	絵(続)	(兵法書を書写する御曹子)			
第18紙	50.2cm	詞	御さうしはきこしめし大事かいて	十九	十	
第19紙	50.2cm	詞	給ふへしみつからかなにとかなりて		十一包	
第20紙	48.8cm	絵	(別れを惜しむ御曹子と朝日天女)			
第21紙	49.4cm	詞	さるほとに御さうしはしのひてたい			
第22紙	24.6cm	詞	はめてうきくつといふ馬なとにのり		十三包	
第23紙	50.4cm	絵	(海に入り、御曹子を追う鬼たち)			
第24紙	49.8cm	絵(続)	(船で逃げる御曹子)	は五		
第25紙	49.4cm	詞	このやまをたつぬるそのひまにまた		十四	
第26紙	50.4cm	詞	てんによあしたの露ときえたまふ			
第27紙	28.4cm	詞	ことのうたかひなしとてよろこひはかき		十六包	
第28紙	50.2cm	絵	(秀衡の屋形)			
第29紙	50.0cm	絵(続)	(秀衡と御曹子の対面。御曹子の枕上で泣く朝日天女)	は□		
第30紙	49.6cm	詞	御さうしかつはとおきさせ給ひいかに			
第31紙(白)	15.6cm					
第32紙	49.4cm	狂歌				
第33紙	22.0cm	(続)				
第34紙(白)	21.0cm					